

# 非行系青少年支援における「男性性」の活用

文化実践に埋め込まれたリテラシーに着目して

知念 渉

## 要約

本稿では、田川ふれ愛義塾の塾生たちが非行に向かう過程および更生に向かう過程を男性性の視点から分析し、リテラシーに関わる実践や支援が、ジェンダー実践のような、より広い文化実践に埋め込まれていることを示す。本稿での分析をふまえると、リテラシーに関する支援は、学習者の生活世界に寄り添い、そこで行われている文化実践をふまえながら、学習者とともに社会的目標を構築することを出発点としなければならない。

## 1 はじめに

男として憧れもありますけどね。ヤンキーしとったら、ヤクザに落ちるのも簡単じゃないですか。簡単になれるんですよ。全然。自分だってスカウトとか来たことがありますし。でもそれでやっぱりチンピラをカッコいいと思わない。むしろ工藤さん（理事長）みたいな生き方の方がカッコいいと思うし。マイナスから這い上がる。ゼロから食べるのよりそっちの方が大変と思うんですよ。そこはやっぱり根性というか尊敬しますし。やっぱりついていきたいと思いますし。そういう風に。

（ケンスケ／男性／10代）

上記の語りは、田川ふれ愛義塾の塾生ケンスケがインタビューの際に語ったものである。ケンスケは、「2回目」の少年院を出所した後、引き受け先となったふれ愛義塾に入塾した。私たちがインタビューした頃、入塾してすでに半年以上が経過しており、卒業間近であった。そのようなケンスケの語りに表れているのは、ふれ愛義塾の理事長に対する「男としての憧れ」である。ふれ愛義塾には、ケンスケのように「男

として」理事長に憧れる塾生が少なくない。

田川ふれ愛義塾には、入れ替わりながらも常に20人ほどの若者が在籍しているが、その多くは男性である。たとえば、筆者がフィールドワークを行った2013年3月時点では、全塾生17人のうち、14人が男性であった。本調査において、インタビュー対象者（被支援者）が、男性4人に対して女性1人であることも、そうした塾の性別構成を反映しているからである。

「男としての憧れ」である理事長の存在や、塾生のほとんどが男性であることをふまえると、田川ふれ愛義塾は非常に「男性的な場」とあると言えよう。本稿は、こうした田川ふれ愛義塾が男性的な場であることに注目し、男性性（masculinity）の視点から、田川ふれ愛義塾の支援活動のあり方を分析しようとするものである。

リテラシーという観点からみれば、田川ふれ愛義塾は、塾生たちに「読み書き能力」を教えることを一義的な目標にしているのではないし、そのための体系的なカリキュラムがあるわけでもない。しかしながら、田川ふれ愛義塾で支援を受けるなかで、塾生たちは、自らの目標を見つけ出し、それを達成するために自らのリテラシー能力を発揮するようになっていく。た

たとえば、就職することを目標にして通信制高校に通うようになったり、バイクの免許を取るために机に向かうようになる姿が見られた。

本調査の鍵概念である「ローカル・リテラシー」を提唱したバートンとハミルトン(1998)によれば、「リテラシー実践は目的的なものであり、より広い社会的な目標や文化実践に埋め込まれている」(p.11)という。リテラシーに関わる支援といえば、単に「読み書き能力」を身につけさせることだと捉えられがちである。だが、バートンらの指摘にしたがえば、リテラシーに関わる支援は、単に「読み書き能力」を学習者に身につけさせるだけではなく、学習者の文化実践をふまえたうえで、学習者にリテラシーの有用性を理解させることが不可欠だと言えよう。このように考えれば、リテラシーの観点から田川ふれ愛義塾の支援活動に注目する意義は、塾生たちに目標を見つけさせて、リテラシー能力を発揮するように促している点にある。

そこで本稿では、塾生たちが非行に向かった過程、そして、田川ふれ愛義塾に入塾して更生していく過程を男性性という視点から分析し、塾生たちの文化実践をうまく活用している田川ふれ愛義塾の支援活動を描いていく。そうした作業を通じて、リテラシーに関わる実践や支援が、ジェンダー実践のようなより広い文化実践に埋め込まれていることを示したい。

本稿の構成は以下の通りである。まず先行研究をふまえて、男性性とは何かを確認し、男性性と非行の関係、教育・支援と男性性(ないしはジェンダー)の関係がいかに論じられてきたのかを検討する(第2節)。次に調査の概要と田川ふれ愛義塾に関する基本的な事項を確認し(第3節)、塾生たちへのインタビューを通じて、彼らが非行に向かう過程で男性性がどのように関わっていたのかを描く(第4節)。そのうえで、

田川ふれ愛義塾の支援者たちが塾生たちの男性性をどのように利用し支援を行っているのかを明らかにする(第5節)。最後に、本稿で明らかになったことをまとめ、分析結果からリテラシーに関する支援について考察する(第6節)。

## 2 先行研究の検討

### 1 男性性とは何か？

はじめに、男性性とは何かということについて確認しておきたい。男性性とは、「masculinity」という英語の訳語であり<sup>(1)</sup>、「男性」と同義ではない。「男性性」は、生物学的存在としての側面を強調する「男性」とは区別され、それが社会的構築物であることを表現するための概念であり、「本来的に『女性性』との対比でのみ存在しうる関係的な概念である」(Connell 1996, p.68)。

私たちの社会では、女性が「ジェンダー化された存在」として捉えられるのに対して、男性は普遍的・中立的な存在として捉えられる傾向にある。つまり、「男man, hommeはいつも人間を代表し、男を標準として女woman, femmeはそれとの差異化においてのみ定義される」(上野 2002, p.17)のである。非行を例にとると、女子の非行は「女子」特有のもののみなされる一方で、男子の非行は、必ずしも「男子」特有のものとして捉えられない。

しかし、よく考えてみれば、男性もまた「ジェンダー化された存在」である。それは、男性が「男らしい」／「男らしくない」という評価にさらされていることから明らかであろう。「男性性」とは、男性を普遍的・中立的な存在とみなすことを否定し、「ジェンダー化された存在」として男性を分析するための概念なのである。本稿では、そうした「男性性」概念を用いて、

田川ふれ愛義塾の塾生たちの非行に至ったプロセスや田川ふれ愛義塾の支援を分析したい。

## 2 非行と男性性に関する研究

それでは、非行に向かう過程において男性性がどのような役割を果たしているのか。こうした点に関わる実証研究は、日本においてはほとんどないというのが現状である。だが、それは非行研究において、男子を扱ってこなかったという意味ではない。むしろ、多くの研究領域でそうであったように、非行研究においても女子は研究対象から相対的に排除されてきた。つまり、非行少年とって第一に想定されるのは男子であり、非行研究といえば、非行する「男子」の研究であった。

しかし、従来の非行研究は男子を主な研究対象にしていたとはいえ、男性を「ジェンダー化された存在」として捉えていたわけではない。むしろ、それらの研究は、女子の非行を女子特有のものとして捉えようとする一方で、男子の非行を対象とする場合、男子が「男であること」は自明視されてきた。たとえば、社会学の古典的研究である『暴走族のエスノグラフィー』（佐藤1984）には、暴走族のファッションやスタイル、そして、「オチツ」いていく男性の姿が詳細に描かれているが、ジェンダーないし男性性の視点からの分析はほとんどなされていない。古典的な佐藤の研究だけでなく、こうした傾向は現在まで続いていると言えよう（五十嵐2009など）。

他方、英語圏に目を向けてみると、1990年代頃から男子の非行を「男性性」の視点から分析する研究が蓄積されてきた。その代表的な論者として、メッサーシュミットを挙げることができる。メッサーシュミットによれば、「暴力は、多くの男性にとって男性性を構築するのに適切な資源としての役割を果たしている」

(Messerschmidt 2000, p.12)。そのため、男性たちは、自らの「男らしさ」が危機にさらされたとき、「男性的資源」として暴力を行使するのだと論じている。そこで4節では、こうしたメッサーシュミットの議論などをふまえて、男子の非行の内容やそこに向かう過程を、男性性という視点から分析する。

## 3 支援におけるジェンダー

非行少年たちの矯正ないし更生にジェンダーの要素がどのような役割を果たしているのか。このことについて考察した研究も、管見のところ、見当たらない。しかしその一方で、学校教育という領域まで視野を広げると、教師たちが生徒たちを教育する過程のなかで、ジェンダー・カテゴリーがどのように使用されているのかという研究は、従来から蓄積されてきた。たとえば森（1989）は、幼稚園での観察調査を通じて、「男女差のしつけ」がフォーマルにもインフォーマルにも教育目標にはなっていないにもかかわらず、「男の子・女の子」という性別カテゴリーとそれに付随する性役割のステレオタイプを教師たちが子どもを統制するために利用している姿を描いている。また、宮崎（1993）によれば、教師たちが性別カテゴリーを使用する際、必ずしも生徒に性役割を伝えようとしているわけではなく、生徒たちの「操作・統制の手段」としてそのカテゴリーを使用しているにすぎないのだという。森や宮崎の研究が明らかにしたことは、教師たちが円滑に教育を行おうとするなかで、無意識に性役割を再生産している現実である。

また、これまでの研究では、生徒たちの自尊感情を高めることを目的として性別カテゴリーが利用されていることも指摘されている。土田（2008）の論考はその一例である。土田は「自己主張が苦手でおとなしい男子生徒が多いA高

校の専門科コースに注目し、彼らの自尊感情が総じて低くなりがちであることを指摘すると同時に、A高校の教師たちが彼らに自信をつけさせるために、「自立してけるような男らしさ」を育む支援を行っていることを明らかにした。児童養護施設で調査を行った山口（2013）も、土田と同様の指摘をしている。山口によれば、施設の職員の実践において、「男らしさ・女らしさ」を伝えることは、「施設に入所する前の生活で傷ついた子どもの自尊感情を立て直すための手段」（2013, p.59）となっているのだという。

これらの先行研究から明らかなのは、教育実践や援助実践が行われる中で、「男らしさ・女らしさ」といったジェンダーに関する要素が、実践者によって様々な利用されているということである。先行研究は、学校や児童養護施設での調査に基づいたものであり、少年院や更生保護施設に関するものではない。しかしながら、本稿の冒頭で示したように、塾生が理事長である工藤に対して「男としての憧れ」を抱いていることや、田川ふれ愛義塾の塾生の多くが男子であることをふまえると、田川ふれ愛義塾の実践において男性性が重要な役割を果たしていることは容易に想像できる。そこで第5節では、田川ふれ愛義塾の実践を男性性の観点から分析することを試みたい。

### 3 調査の概要

本稿の分析は、2012年2月から10月にかけて行ったインタビューと2013年3月11日から14日にかけて行った参与観察によって得られたデータに基づいている。インタビューは、支援者5人（男性3人、女性2人）と、被支援者5人（男性4人、女性1人）に行った。一方、参与観察は、筆者自身が4日間、午前8時過ぎから午後

8時過ぎまで塾生たちと活動をともにしながら行った。

分析する前に簡単に田川ふれ愛義塾のシステムや一日のスケジュールについて簡単に説明しておこう。田川ふれ愛義塾には、少年院を出所した者や家庭でなんらかのトラブルを起こした者が入塾してくる。理事長の言葉を借りれば、「不良少年の駆け込み寺」である。

入塾後の過程は以下の通りである。塾生たちは入塾すると数ヶ月間「本部」と呼ばれる建物で過ごす。本部での基本的な一日は、おおよそ表1のようになっており、まずは、このスケジュールに従って過ごすこと、すなわち、「生きていくための基礎」を身につけることが目指される。そして「塾のことができるようになった」と判断されれば、就職活動を行って就職する。その後も働きながら「本部」で生活し、十分に自立しているとみなされれば、本部の隣にあるマンション（二人一室）に移動し、そこで生活することを許可される。ただし、マンションで生活するとはいえ、朝食や夕食は「本部」で食べることになっていたり、スタッフが各部屋を見回りすることになっている。このようななかで、自立した生活を一定期間営むことができた塾生は、晴れて卒業となるのである。なお、個人個人によって抱える課題が違うために、「自立」の内容も個人によって異なるが、基本的

表1 田川ふれ愛義塾の一日のスケジュール

時間	活動内容
8:30	起床
9:00	朝食
9:30	掃除
自由時間（夏場は畑仕事）	
12:00	昼食
16:00	写経
18:00	夕食
自由時間	
23:00	就寝

には、生活習慣を身に付け、仕事をきちんと続けている状態というイメージでよいだろう<sup>(2)</sup>。

ちなみに、田川ふれ愛義塾には2013年3月現在、17人の塾生がおり、そのうちの3人は女子である。女子の場合、入塾当初からマンションの一室で過ごし、本部にくることはほとんどない。女子は朝食や夕食も自分の部屋で食べている。また、塾内で異性と接することは基本的に禁止されており、男子たちは女子のことを「顔と名前が一致しない」ほど知らない。筆者も参与観察中のほとんどの時間を「本部」で過ごしたために、女子たちとはほとんど接することがなかった。このように男子と女子の間には明確な境界があり、それぞれに応じた支援が行われていた。したがって、ここで述べたことは男子塾生に対する支援であると考えた方がいだろう<sup>(3)</sup>。

## 4 非行と男性性

本節では、男子の非行の内容やそこに向かう過程において、男性性が果たしている役割を分析する。前述したように、日本において非行と男性性の関係に着目した実証研究はほとんどない。しかし、塾生の語りには、非行と男性性が関わっているであろうことが示唆されている。その端的な表れとして暴力に注目しよう。たとえば、以下は塾生の語りである。

入ったきっかけですか。その、あれっすね。家の、その、自分が暴れよったんですよ。家で。それで、親が連絡して、きたっすね [中略] 働きもせずに、学校もいかんで、遊びたいだけ遊びよって。そしたら金なくなるじゃないですか。やきー、それで、親に金やれ、みたいな。それで暴れよったっすね。

(ヒロキ／男性／10代)

ヒロキは日常的に家族に暴力をふるっていたために、ふれ愛義塾に入塾することになった。2節で紹介したメッサーシュミットによれば、「男性性を構築するための適切な資源は状況に応じて変化する」ものの、「多くの男性にとって、暴力は、男性性を構築するための適切な資源となっている」(2000, p.12)のだという。メッサーシュミットが想定しているのはアメリカであるが、上記の語りは、日本でも、男子がトラブルを引き起こす際に暴力が介在していることを示していると言えよう。

ただし、少年たちが常に暴力的であるというよりも、暴力は特定の状況の中で生じる。そのことについてメッサーシュミットは、「男らしさに対する挑戦」(masculinity Challenges)、すなわち、仲間、教師、親からからのからいかいや侮辱を受けることによって、少年たちは暴力をふるうと論じている。本調査においても、暴力が起こる状況は他者と対峙したときであることが確認できた。たとえば、次の語りは教師とのやりとりのなかで暴力的に振る舞ったと回想する塾生の語りである。

\*：学校のなかで暴れてた？暴れてたって変だけど (笑)

ユウキ：まあ暴れたりとか、

\*：何してた？

ユウキ：先生殴ったりしとったっすね。

\*：授業にでなかつたりとか？

ユウキ：授業出て、授業妨害おれらがしよって、怒られて、それでキレてイス投げたりしよったけー。

(ユウキ／男性／10代)

上記で語られているように、少年たちは常に暴力的に振る舞っているのではなく、特定の状況のなかで暴力的なふるまいをしていた。した

がって、少年たちが本質的に暴力的であるというよりは、メッサーシュミットの指摘するように、他者との関わりの中で「男らしさに対する挑戦」を受けることによって、暴力は発動されると考えた方がよいだろう。

また、暴力以外にも男子特有のものだと考えられる非行が確認できた。それはバイクの窃盗である。『平成23年中における少年の補導及び保護の概況』によれば、男子の刑法犯罪種において、全体のなかでオートバイ盗が10%を超えており、女性の2%に比べると高い割合を占めている。本調査でもそれは例外ではなく、バイク窃盗やバイクの無免許運転が鑑別所や少年院へ入るきっかけとなった事例がいくつか確認できた。

\*：何がきっかけで結局鑑別所行くことになったん？最初は。

ユウキ：まあ罪名は自転車窃盗なんですけど、まあ、その前に、2回捕まっとったんですよ。ガソリン抜いた件とエイプ（HONDAのバイク）盗んだ件で。

（ユウキ／男性／10代）

このように、男子に特有の犯罪内容が本調査においても確認できた。さらに興味深いことは、その非行に向かう過程のなかで、先輩との関係が多く関わっていたことである。

\*：一番初めはどういうきっかけで？

ユウキ：…夜遊んで、楽しくなって、そっから色々人と遊びだして、で、バイクの盗み方とか聞いて。

\*：それは上の人とかもいた？

ユウキ：そうっすね。中3とかからもう、ずっと年上、先輩と遊んでたんで。

（中略）

\*：遊ぶってというのは？

ユウキ：まあ、しゃべったりとか、でたまに暴走。目の前で暴走したりとか、駅の前で。

（ユウキ／男性／10代）

このように男子たちは、先輩や仲間とのつながりのなかで、非行の仕方を学んでいく。もちろん、非行に向かう彼らの背景には、彼らの家庭背景や学校経験があることは間違いない。しかしながら、そうした背景をもちながらも、非行へ至る直接的な「引き金のタイミング」は「いろんな先輩が誘ってとか。ケンカに勝ってからとか」（理事長）なのである。

それに対して、女子の塾生で唯一のインタビュー対象者であるマイは、先輩とのつながりも語っていたが、それよりも1人の友人との関係を強調した。マイの語りは、上記で紹介したユウキの語りとは対照的である<sup>(4)</sup>。

マイ：遊んでましたね、行ったら。中学校の下にすぐマック（マクドナルド）があるんですよ。よう、マックにたまってました。

\*\*：（笑）友だちと？

マイ：はあい。

\*\*：女の子？友だち？

マイ：女です。でも自分いつもいっしょにおった子は、隣のF市の子なんですよ、女の子。

（中略）

\*：友だちってさあ、グループみたいの作ってるとかじゃないの？

マイ：自分たちは単独行動ですね。グループっていうか、集団でも地元で。

\*：よくほら名前付けたりとかして。

マイ：あ、ないですね（笑）

（マイ／女性／10代）

本調査では女子へのインタビューはマイにし  
か行っていないために、こうした過程が、必ず  
しも男子に特有のものであると断言すること  
はできない。しかしながら、メッサーシュミ  
ットの議論との類似性や、唯一の女子である  
マイの語りとユウキの語りとの対照性など  
をふまえると、男子に特有の非行に向かう  
過程があると考えてよいのではないだろう  
か。

以上で描いてきたように、塾生たちが非行  
に向かう過程には、男性性が強く関わって  
いる。こうした男性性のあり方は、通常、  
非行と深く関わっているために、更正の  
過程において否定されるべきものとして  
考えられがちである。しかしながら、田川  
ふれ愛義塾ではこうした塾生たちの男性  
性を否定することはしない。むしろ、上手  
く活用しながら塾生たちを更正させてい  
くのである。次節では、田川ふれ愛義塾  
において塾生たちの男性性がどのように活  
用されているのかをみていきたい。

## 5 支援活動における男性性の活用

本節では、田川ふれ愛義塾の支援者たちが、  
前節でみてきた男子たちの男性性を上手く  
利用しながら塾生たちを支援し、更生させ  
ていく方法について述べる。はじめに述べ  
たように、田川ふれ愛義塾では男子と女  
子は基本的に別々の方法で支援されてお  
り、日常的に互いがふれあう機会はほと  
んどない。その様子について塾生の本  
トヒロは言う。

\*：朝も女子はここで食べないの？

本トヒロ：向こうです。全員。ずっとマン  
ション。女子は隔離された状態です。おれ  
ら関わるの禁止です。関わりたくもない  
ですけどね。

\*：女子と関わるのって禁止されてるの？

本トヒロ：しゃべるのもダメです。まあ、  
ちょっとくらいたまにしゃべるのならいい  
んですけど。そういう行事で。たぶん、だ  
いたいしゃべらんす。しゃべりたくもな  
いす。

(本トヒロ／男子／20代)

田川ふれ愛義塾では、以上のように男女の  
間に明確な境界線が引かれていると同時に、  
男子に対しては、彼らの男性性を利用しな  
がら支援する方法がとられていた。もっとも  
分かりやすいのが、目標設定に関する点で  
ある。田川ふれ愛義塾では、入塾して一定  
期間経つと働かなければならないことにな  
っているが、その際に塾生の興味関心に  
沿って働く意味を伝えていた。そのこと  
について理事長は次のように述べる。

そのまず、仕事をさせるにしても、仕事  
の意味が分からないじゃないですか。だか  
ら目標を想定して一緒にそこに向かってい  
くという。例えば16歳のユウキの場合、  
バイク好きやからバイクの免許ですよ。免  
許とお前、買えばええやないかと。堂々と  
乗れるぞと。で、乗ったらバイク買うとき  
、おれがついていくし、改造もおれがして  
やるよと。カッコ良く言ったりしたらノッ  
てきて[中略]そこでも誘導ができるじゃ  
ないですか。目標ができると。そしたら  
10万貯めたら免許とれるやんかと。あと  
はまあ、18歳(の塾生)だったら車の免  
許ですよ。

このように、田川ふれ愛義塾では、彼ら  
の興味関心にしがって目標設定を行い働  
く意味を伝えていた。たとえばオートバイ  
の窃盗や無免許運転でトラブルを起こした  
ユウキに対しては、バイクを買うために、  
あるいは免許をとるために働けばいいと  
伝えていた。理事長によれば

ば、「みんな、好きなことに関しては、ものすごいパワーを出すから〔中略〕だからやっぱり誘導の仕方と本人の目標。誘導すればものすごいパワーを発揮する」というわけである。

田川ふれ愛義塾では、特定の時間や場所を設けてリテラシーに関する支援を行っているわけではないが、上述のように塾生たちの目標をもたせたうえで、それに応じたリテラシーに関わる支援を適宜行っていた。たとえば、就職活動のために履歴書を書かなければいけない塾生に履歴書の書き方を教えたり、高校に通う塾生のために、学期末試験がある時期に近くの大学生を集めて学習会を開いたりしていた。上記に登場するユウキの場合は、バイクの免許を取るために就職活動を始めるが、その過程のなかで、高校を卒業していないと将来就職することが難しくなると気づき、通信制高校に通うようになった。そして、高校に通うなかで、ボランティアの大学生に勉強を教えてもらったりしていた。このように田川ふれ愛義塾では、まず塾生たちに目標をもたせたうえで、リテラシーに関する支援を行う。そして、目標をもたせる際に、彼らの男性性が活用されていたのである。

また、理事長である工藤は、塾生たちが先輩とのつながりのなかで非行・犯罪に向かっていくことを理解しているがゆえに、自ら塾生の「兄貴分」や「親父」の役割を果たそうとする。

とくにマサヒロなんかはヤクザと付き合いずっとしてきて、入れ墨もいってますからね。あの、価値観を変えてやらんといけんと。そういうときには、兄貴分にならんといけんとすね。要は今までの兄貴分よりも上回らんといけんから。ただ、はっきり言って、この人性根が違くなっていうところをみせないけないですよ。中途半端じゃなくて。なんかあっても俺に任せとけと、俺が絶対してやるから、

と。なんかあってもお前守ってやるよとか言うくらい、踏み込まんよ。

上記の語りに表れているように、塾生たちが「先輩とか付き合いとかで悪くなっていく」部分をふまえて、理事長は、「今までの兄貴分よりも」上回るように努めて、塾生たちの信頼を獲得しようとしていた。

さらに、田川ふれ愛義塾では支援の際に、上下関係を重視する男子特有の関係性を活用していた。つまり、塾生たちが上下関係を重要視することをふまえ、支援の際にそうした男子たちの上下関係を上手く利用していくのである。

まず、塾生たちがいかに年齢の上下関係を重要視しているのかを見ていこう。塾生たちは上下関係に非常に気を使うため、それがトラブルの原因になることも少なくない。筆者が参与観察を行っている際も、些細なことからトラブルになりかけていた。次の場面は、夜勤に就くマサヒロのことを、年下のカズヤが「連中」と呼んだことで、些細なトラブルになりそうな場面である。

カズヤ：(支援者に向かって) ○○ちゃん、

今日夜勤連中多いんすか？

マサヒロ：連中？

カズヤ：あ、いやいや(笑)。夜勤組。

マサヒロ：別にいいよ、連中ね、連中。(と  
言いながら作り笑いをする)

カズヤ：マサヒロくん、その笑顔が怖いっす  
(笑)

(2013年3月12日／フィールドノーツ)

上記の場面で、カズヤは支援者に向かって夜勤の塾生が何人いるのかを尋ねようとして「夜勤連中」という言葉を使ったが、それに対して、年上のマサヒロが「連中」という言葉に反応し

で横槍を入れた。夜勤のメンバーであったマサヒロは、年下のカズヤが「連中」という言葉によって年上の自分たちを指し示したのが気に入らなかったのである。この場面ではカズヤが「夜勤組」と言い直し、マサヒロが冗談を言うことでトラブルが解消されているものの、そこには塾生たちがいかに上下関係を大切にしているかが表れている。参与観察中には、この場面以外にも、年上の塾生が年下の塾生に向かって「お前誰に向かって足向けてるん？」と言うなど、上下関係を気にしている様子が多々見られた。

こうした塾生たちが大切にしている上下関係は、ときにケンカや言い合い等のトラブルを起こすことにもなるが、その一方で、支援活動において重要な役割を果たしていた。支援者へのインタビューのなかでは、塾生たちの上下関係が、支援活動の中で効果的に働いていることが多数語られた。

理事長：そうそう。それが自分たちだけが(写経を)やりよったら反発するかもしれんけど、みんながやりよるんです。

\*：ああ～。集団で。

理事長：そうそう、それがやっぱり集団の力やし。お前が一つただこねればストップするんですよ。この子たちの年代って言うのは、やっぱり波動を感じたり、この先輩に逆らっちゃあいけんっていうのがやっぱり今まで生きてきた中で身に付いているから。それも分かって [中略] そうですね。そこはやっぱり本当に環境の力といいますか、その、流されやすい傾向をうまくこと利用したって感じですよ。これ、悪い方向やったらみんな流されて。その環境とか影響大きいでしょうね。

このように男子の上下関係は、必ずしもトラ

ブルのもとになるものではなく、それを上手く利用することにより、支援に活かすことができるのである。

逆に女子の場合は、そうした上下関係が活用できないために、支援が難しいと語られた。次の語りは、理事長のパートナーでもある支援者へのインタビューの中で「これ以上塾生の人数が増えたら、今のスタッフの人数ではもう見れないですか?」と尋ねたときのものである。以下の語りには、上述してきた支援のあり方が、いかに男子に特有のものであるかを示している。

\*\*：まだ(塾生を増やしても)いける感じあります?

ミュキさん：……男子だったら。

\*：(笑) 女子の方が入れない。

ミュキさん：はい。男子なら、男子だけの方がいいですよ。

\*\*：あー

\*：あーはいはいはいはい。

ミュキさん：はい。そのへんな、こう恋愛の、ああいうのを、その気にしなくていい。

\*：男子ってこう、先輩と後輩との関係が強いから。

ミュキさん：はい、そうなんです。縦社会ができてから。

\*：ね? 上の子が、縦社会やもんね、男ってね。

ミュキさん：はい……そうなんです。

\*\*：あの一女子の場合、集団の力って活かせるんですか?

ミュキさん：いや、女子は、

\*：女子は横ですもんねえ。

ミュキさん：そう、横だから、集団で、

(中略)

\*\*：あの一、よく言う、なんだ? 先輩を

見て、ああなるうと思ったとかつてのは、  
塾生の語り聞いているとあるような気がする  
んですけど、女子とかにとっては難しいで  
すか？

ミュキさん：ないですね、ほとんど。

ミュキさんによれば、男子は「縦社会」を活  
かして支援できるが、女子の場合は関係性が「横  
だから」、支援の際に縦関係を動員することが  
できない。そのため、女子への支援は難しいの  
だという。

もちろん、このことは、田川ふれ愛義塾にお  
いて女子に対する支援が行われていないという  
意味ではない。たとえば、私が田川ふれ愛義塾  
に訪問した際には、かつて田川ふれ愛義塾を卒  
業した女性が来塾して、女子の塾生たちと料理  
をしたりしていた。女子の塾生たちのロールモ  
デルになってもらうために、理事長が頼んだの  
だという。この事例から分かるように、女子に  
対しても様々な資源を活用して有効な支援がで  
きるように努めている。

しかしながら、男子と女子ではその支援のあ  
り方が異なっていることは間違いない。田川ふ  
れ愛義塾では、塾生のジェンダーに応じた支援  
が行われており、本節で描いてきたのは、「男子」  
に対する「男性性」を活用した支援活動なので  
ある。

## 6 おわりに

本稿では、男子たちが非行へ向かう過程、そ  
して更生へ向かう過程のなかで、彼らの男性性  
がどのような役割を果たしているのかを分析し  
てきた。そこで明らかになったことは、第一に、  
暴力やバイク窃盗といった犯罪内容や、先輩を  
介して非行へ向かっていく過程が男子に特有の  
ものであるということであり、第二に、田川ふ

れ愛義塾では、そうした男子の特性、すなわち  
男性性を活用して支援が行われていたことであ  
る。つまり、非行に向かう過程においても更生  
へ向かう過程においても、少年たちの男性性が  
重要な役割を果たしていたのである。冒頭で述  
べたように、日本では非行や更生の過程を男性  
性の視点から分析した研究はまだないが、本稿  
の分析結果は、非行に向かう過程、更生に向か  
う過程を男性性の視点から分析することの有効  
性を示していると言えよう。

それでは、本稿の知見は、リテラシーに関す  
る実践や支援を考えるうえでどのような示唆を  
もっているのだろうか。これまで見てきたよう  
に、田川ふれ愛義塾では、塾生たちの男性性を  
活用しながら、集団に馴染ませるとともに、塾  
生たちに目標をもつように促していた。一見、  
このような支援はリテラシーに関する支援とは  
無関係のように思える。しかし、塾生たちは目  
標をもつことで、その目標を達成するために自  
らのリテラシー能力を発揮するようになってい  
た。たとえば、就職活動の際に履歴書を書く練  
習をしたり、バイクの免許をとるために試験勉  
強をしたりするなどである。

このような支援活動のあり方は、バートンと  
ハミルトンの「リテラシー実践は目的的であり、  
より広い社会的目標と文化実践に埋め込まれて  
いる」(Barton & Hamilton 1998, p.11) という  
指摘をふまえると、より明確になる。リテラシー  
実践が本来目的あってこそそのものであるなら  
ば、リテラシーに関わる支援もまた、学習者が  
リテラシー能力を身に付けたいと思える目的を  
見出すことから出発することが重要である。田  
川ふれ愛義塾の支援活動は、より広い文化実践  
(=塾生たちの男性性に関わる実践)を活用し  
ながら、学習者の生活世界に寄り添い、学習者  
の目標を構築していく活動と言い表すことがで  
きよう。

本稿では男性性に着目したが、もちろん、それは「ローカル・リテラシー」概念が女性性に適用できないということではないし、リテラシーに関わる支援を展開するうえで女性性を活用できないということではない。女性性に関わる文化実践に埋め込まれたリテラシー実践があるだろうし、それを活かした支援を行うことはできるだろう。たとえば、本稿では男子特有の「縦」関係が支援に活かされていたが、女性同士の関係の特性として語られた「横」関係を活かして支援のあり方を創造していくことは可能だろう。

いずれにせよ重要なのは、リテラシー実践は、ジェンダー実践のように、より広い文化実践に埋め込まれており、そのために、リテラシーに関する支援は、学習者の生活世界に寄り添い、彼ら彼女らが行っている文化実践をふまえながら、学習者とともに社会的目標を構築することを出発点としなければならないということなのである。

ところで、これらの分析結果から、田川ふれ

愛義塾の支援のあり方が、既存のジェンダー秩序を再生産していると批判することは可能であろう。しかしながら、既に土田（2008）や山口（2013）が指摘しているように、支援者たちの実践を単純に批判することはできない。なぜなら、支援者たちの目的は、被支援者たちを既存の社会に適応させていくことにあるからである。むしろ田川ふれ愛義塾の事例を通じて分かることは、そうした社会に適応させていく実践と、ジェンダー平等を追求する実践との両立が困難であるということだ。したがって私たちがすべきことは、田川ふれ愛義塾で行われている実践を批判するのではなく、ジェンダーに関する事柄がどのような文脈で支援の資源として活用されているのかを把握し、それがどのような役割を担っているのか、そこにはどのような有効性と問題があるのかを明らかにしていくことである。そうした作業を積み重ねていくことで、被支援者たちを社会に適応させつつ、既存のジェンダー秩序をよりました方向へと導く方法を探っていく必要があるのではないだろうか。

## 注

- (1)masculinityは、「男らしさ」と訳される場合もある。しかし、「男らしさ」という表現には一般的に肯定的なニュアンスが含まれているため、分析概念であるmasculinityの訳語としてはふさわしくない（多賀2006, p.19）。そこで本稿では、基本的に「男性性」という語を用いている。
- (2)田川ふれ愛義塾の詳細については、中野・工藤(2012)を参照。
- (3)筆者は、女子塾生に対する支援や関わり方を直接見たことがほとんどない。そのため、女子に対する支援とその効果はどのようなものなのか、男子に対する支援とどのように異なっているのか等の点については、今後の課題とする。
- (4)ただし、その一方でマイは、男子たちと集団で、オートバイで「ハシリに行く」ことも語っていた。したがっ

てマイの事例は、女子が男性性を実践するケースとしても分析できそうだが、それは今後の課題としたい。

## 引用・参考文献

- Barton, D. & Hamilton, M. (1998) *LOCAL LITERACIES: READING AND WRITING IN ONE COMMUNITY*, Routledge.
- Connell, R.W. (1996) *Masculinities*, University of California Press.
- 五十嵐太郎編 (2009)『ヤンキー文化論序説』河出書房新社。
- 警察庁生活安全局少年課 (2012)『平成23年中における少年の補導及び保護の概況』、[http://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/hodouhogo\\_gaiyou\\_H23.pdf](http://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/hodouhogo_gaiyou_H23.pdf) (2013年7月14日最終アクセス)。

- Messerschmidt, J.W. (2000) *Nine Lives :Adolescent Masculinities, the Body, and Violence*, West view Press.
- 森繁男 (1989)「性役割の学習としつけ行為」柴野昌山編『しつけの社会学』世界思想社、155-171頁。
- 宮崎あゆみ (1991)「学校における『性役割の社会化』再考 —教師による性別カテゴリー使用をてがかりとして」『教育社会学研究』第48集、105-123頁。
- 中野直毅・工藤良 (2012)「NPO田川ふれ愛義塾の軌跡と現状 「遊び・非行型」不登校生や社会で苦しみ悩む少年によりそって」『部落解放研究』No.195、93-104頁。
- 佐藤郁哉 (1984)『暴走族のエスノグラフィー モードの叛乱と文化の呪縛』新曜社。
- 多賀太 (2006)『男らしさの社会学 揺らぐ男のライフコース』世界思想社。
- 土田陽子 (2008)「男の子たちの多様性を考える 周辺化されがちな男子生徒の存在に着目して」木村涼子・古久保さくら編『ジェンダーで考える教育の現在 フェミニズム教育学をめざして』解放出版社、62-77頁。
- 山口季音 (2013)「『男らしさ・女らしさ』の伝達を考える—児童養護施設職員の実践を通して—」『ヒューマン・ライツ』No.299、54-59頁。